

第7回実心実学読書会  
(2021年10月30日)

後藤彰信先生著『石川三四郎と日本  
アナーキズム』を読んで

名古屋経済大学 李 彩華

## 自己紹介

- 李彩華、名古屋経済大学経営学部に勤務
- 近年に書いたもの
  - 「明治・大正前期における柳田國男と横井時敬の農政思想—農本思想の近代化への対応の視点から」『哲学と現代』28号（名古屋哲学研究会編2013年）
  - 「〈知の制度化〉から考える清末民初中国哲学の日本における伝達状況」『哲学と現代』32号（名古屋哲学研究会編2017年）
  - 「頭山満のアジア主義」『哲学と現代』33号（名古屋哲学研究会編2018年）
  - 「梁啓超と章炳麟のアジア主義言説—近代日本のアジア主義への対応の視点から」『哲学と現代』34号（名古屋哲学研究会編2019年）



（1990年代に尊敬する東京学芸大学の西村俊一先生（故人）より頂いた「義人田中正造」の泥人形）

# はじめに

- 本書は、「向こう側の世界」（共同的な小社会）から「こちら側の世界」（近代市民社会）への「切穴」を潜った人々の経験（序章と片岡先生メールの言葉）、中でもとくに石川三四郎の農本的アナキスト経験の軌跡を丹念に辿った労作。そこから石川に象徴される日本アナキズムの今日的な意義についての示唆も得ることができる。
- 同じく序章で述べられた「アナキストたちが戦いを挑むべきであったのは、体制そのものだけでなく、反体制運動をも自らをも包み込む、このような社会編成原理そのものであった」（4～5頁）という指摘は、とりわけ感銘を受け、興味深く読ませて頂いた。



- 本書の議論の主軸は、石川思想と活動に置いている。と同時に半分以上の分量は、石川思想を生んだ同時代のアナキズム運動とサンジカリズム運動に割かれている。
- 石川と同じ時代のアナキズム運動とサンジカリズム運動について、私自身の勉強が不足しているため、コメントを控えさせて頂く。
- 私は、もっばら、本書の描き出そうとする**石川の潜った「切穴」**について、いくつかの側面から注目してみたい。

# 1. アジアの社会主義者やアナキストたちとの関係性の側面から

- 本書の第一章と第二章では、初期の社会主義・アナキズムの論壇の状況が様々に論じられており、その中で、20代後半から30代前半にかけての石川の思想と活動が考察されている。（平民社での活動や『新紀元』の創刊、田中正造との深い交流、『虚無の靈光』における「変革理論の端緒的形成」など）。とくに『虚無の靈光』は後の「土民思想」の原点をなしているとの指摘は、私にとって学ぶことが実に多かった。
- そこで、早期石川の活動について私なりに関心を持ったのは、**アジアの社会主義者やアナキストたちとの関係性**はどのようなものだったかということ（**=質問として**）。



- 当時の日本の初期社会主義者やアナキストたちの周辺で、中国や朝鮮などから日本に留学や亡命してきた知識人や思想家たちが多くいた。20世紀の初め頃には、様々な形で交流関係を持っていたと思われる。
- 例えば、1905年に東京で成立した中国の革命組織「中国同盟会」の内部で章炳麟（1869～1936）、張継（1882～1947）、劉師培（1884～1919）というグループの人たちがいて、アメリカ支援依存の孫文グループと対立していた。彼らは中国のアナキズムの系譜に連なる人たちである。



- 彼らは日本でいち早く日本の社会主義者やアナキストたちと思想的な交流関係を持っていた。幸徳たちの「金曜講演会」にも参加していた。1907年8月頃には、幸徳たちの「金曜講演会」に倣って、独自の「**社会主義講習会**」を組織し、幸徳たちを講師に招いたりした。
- 彼らのグループは、章炳麟を中心に、1907年にインドの亡命独立活動家たちと共に主導して、アジア諸民族提携論の立場から、「**亜州和親会**」という**コスモポリタンのな連帯組織**を創設していた。



- 「亜州和親会」の会合には、中国とインドの革命家のみならず、堺利彦・山川均・大杉栄・竹内善作・守田有秋といった社会主義者とアナキストたち、さらにベトナム・ビルマ・フィリピン・朝鮮からの同志も参加したりしていたという。
- ただし官憲の弾圧が厳しかったため、同会は翌年に実質上活動を中止せざるをえなくなった。
- 本書の記述する石川の経歴から見れば、この前後は石川が獄中にある時期（1907～1910）。石川は「亜州和親会」と直接関わったかどうかは不明。

補足説明：昨日にこのコメント原稿を書き終えた後に片岡先生から共有される資料「石川三四郎のみた中国」（川上哲正）に接した。これにより、石川は章炳麟や張継たちと交流していたのがわかる。こういう優れた研究があることを知らなかった自分が恥ずかしい。





- 1913年の石川のヨーロッパ亡命について、ウィキペディアには「ベルギーや中国のアナキストの支援を受けてヨーロッパに渡った」という記載がある。また、石川のヨーロッパ亡命のルートは、上海や香港を通っていると読んだことがある。
- こうしたことから、早期石川もアジア、中でもとくに中国のアナキストたちと何かの交流関係を持っていたと考えられる。
- 石川とアジアの人的交流のことも考察してみる余地があるのではないかと、本書を読んでヒントを得た。

補足説明：資料「石川三四郎のみた中国」から、石川の亡命を金銭面で援助していたのは鄭毓秀（中国同盟会成員）であることがわかった。なお、資料に書いてある、石川が上海到着後の3月6日に宋教仁に会っていることに驚いた。宋教仁はその16日後に上海で暗殺された。  
※鄭毓秀は1914年にフランス留学を果たしている。張継も1908年と1913年とで二度フランスなどヨーロッパに渡っている。（彼らはヨーロッパで石川と接点があったかどうか？）

## 2. 吉野や正造の思想との関係性の側面から

- 第三章で論じられている1920年代の石川と吉野作造の思想的交差の軌跡も、本書の興味深い切り口の一つ。
- 本書によれば、1920年、石川はヨーロッパより一時帰国後、吉野の指導下にあった**東京帝大新人会主催の「宣伝演説会」**で、「土民生活」と題する講演を行った（131頁、134頁参照）。
- 両方とも**コスモ倶楽部**（1921年創立、主宰は堺利彦）へ関与した軌跡がある。（コスモ倶楽部は、大杉栄や堺利彦などの社会主義者、中国および朝鮮の留学生や外国人などからなり、東アジアを中心とする社会主義運動の連帯を目的として組織されたもの）（134～135頁参照）。



- 両者の思想は、すでに若き日時代から交差していた。本書にある「本郷教会における社会主義論争」（1905年）の議論などがそれを教えてくれる。若き日の両者は、ともに政治思想史/社会運動史分野の論壇における輝かしい知識人。
- だが、1920年代の段階では、吉野はすでに論壇の中心で活躍するエリート。一方、ヨーロッパ亡命生活から戻った石川は、メジャーではなく、むしろ日本における活動の足場を失っていたと言える。
- 石川の土民思想は、**優れて先見的な「共生思想」**であることに間違いはない。しかし当時では認められていたわけではない。



- 本書で論じているように、石川は、カーペンターの影響を受けて、またフランスで農業生活を実践し、自然に親しみ、そうしたなかで、「**土着の民衆の暮らし**」こそ真のデモクラシーだと考えて、Democracyを「土民生活」と訳して提唱するようになった。
- 石川の思想と実践は「政治的」というより「社会的」。その「土着の民衆」は、国や民族の隔たりに囚われていない。前述の章炳麟たちの「亜州和親会」と同様、**コスモポリタンな平和的な立場**ととらえるのにふさわしい。



- 吉野は、「内地人と植民地民の平等な待遇と権利」を主張して、政治的な意味で差別を排撃するものとして「土民」の概念を用いたと指摘されている。吉野は国民国家を前提とするインターナショナルな立場。
- 日本帝国の内部に留まっていた吉野の「土民」概念よりも、石川の「土民」はもっと広い「世界主義」的な視野を持っているといえる。国家を超えたコスモポリタンの「デモクラシー」の立場を確立している。（洪伊杓（ほん いびよ）「海老名弾正の『植民地民』理解—海老名弾正の『土人』と吉野作造・石川三四郎の『土民』の比較を中心に—」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』2018年1月参照）



- 石川の「土民」は農民だけでなく、「天地の大芸術に参加する労働者」全体を意味している。だが優れた農本思想家と位置付けることも当然できる。
- ただ、石川は「農村の復興」ということを自らの課題としていなかった。**1930年代初頭の農本主義運動**（日本村治派同盟や急進的な農本連盟など）に関与していなかった。
- むしろ、それらを国家主義を背景にもち、民衆の自発性に欠けた農本主義の一系譜として批判し、自ら自覚的に保守的な農本主義と一線を画していた。



- 本書でも指摘しているように、石川が関与した農民組織は「サンジカリズムの農民版ともいうべき」「**農民自治会**」（1925年創立）。これは**江渡狄嶺**などの影響を受けている組織。反都市主義や反文明主義的な傾向をもっている（194頁参照）。
- 石川自身も「農本主義と土民思想」（『ディナミック』第4巻、1932年）という論文の中で、「土民思想」と農本主義の「現存の支配権力」をめぐるスタンスの相違を強調していた。



- 石川が説明した「土民生活」論と農本主義の違い

①農本主義は現存の支配権力の温情主義政策にしか過ぎないが、「土民生活」論はそうした欺瞞を暴露し抵抗して自分の生活を守ろうとする思想。

②農本主義は農民だけを中心にし全社会層を包摂するものではないが、「土民生活」論は一切の産業の自治・土着を意味する。

③農本主義は**現体制に依存して農本的自治を行うものである**が、「土民生活」論は資本や権力の桎梏から人間を解放しようとする思想。（西村俊一『日本エコロジズムの系譜——安藤昌益から江渡狄嶺まで』農文協1992年参照）





本書第一章第一節の書き出し：「石川三四郎の思索と行動は、価値形成的な論点を立てて支配体制に抗し、支配の側が陰に陽に強制する『価値』を乗り越えようとする、日本の社会思想史上においては稀なかたちで営まれた」（13頁）。

- この書き出しは、土民思想の抵抗精神への指摘と見て取れる。石川の抵抗精神の原動力は、田中正造の思想に共鳴、帰依する所からきているといえる。
- 石川は、谷中村残留民とともに苦闘する正造の信念に深く共感し、普通選挙運動をはじめとする政治運動に見切りをつけていたし、さらに、谷中村強制廃村事件に資本主義化を推し進める政治の罪悪を知り、その罪悪を生み出す**政治自体を否定する**に至ったといっても過言ではないだろう。



- 石川は江戸時代に徹底して農民の立場から反権力的な農本思想を展開した**安藤昌益の系譜**に属しているといっていよいと思う。
- 石川自身も、後に昌益を「土に還れ」という思想をルソーより100年も先立って表明した人物として高く評価していた。
- 石川は正造の闘う姿に、昌益の再来、「土民」精神の原型を見たに違いないだろう。

### 3. 「土民思想」の今日的意義の側面から

- 土民思想は当時では「ユートピア」と見られていたが、今日から見れば、むしろエコロジーや共生思想の先駆といえる。
- 本書の言葉を借りて言えば、石川は、「直接生産者として自然の摂理に則った生活をする「土民」のなかに、個と自然の統合を見、**自律的存在としての「土民」が連帯し社会関係を取り結ぶこと**で個と社会が統合される」（202頁）と考えた。



- ところで、「土民」はいかにして連帯し社会関係を取り結ぶか？
- 本書は主としてサンジカリズムとの関わりで石川を論じているため、土民はいかに連帯するという課題への具体的な考察は目標ではなかったかもしれない。
- 50代半ばの石川は、「自由社会の想望」（『ディナミック』第11号1930年）「社会美学としての無政府主義」（『ディナミック』第29号、1932年）といった論文を発表し、独自の言葉による**実践的な自治の議論**（個の変革と社会変革の統合理論）を構築していた。



- 例えば「複式網状組織」というキーワードから語り出す社会変革論。
- 石川によれば、多様な人々は、様々な目的関心や趣味の一致に基づき、地域、職業、趣味、生産、消費、技術など、いわば生活の総体として、多様な軸線に沿って様々な小社会をつくる。
- 様々な小社会は、互いに交通し合い、複合的・重層的なネットワークをなして、全世界的に連合し協働していく。



- このような縦横無尽に連合し合う小社会では、組織の内部における**強権の発生を相互規制することも可能**という。
- 即ち、ある個人は、生活のいろいろな場面に応じて**複数の小社会**に所属することになる。ある小社会では指導的な立場に立ち、また別の小社会では指導される立場にもなりえる。互いに異質でありながら平等であり、対等であるということ。

「生産組合も、消費組合も自由、平等、相互連帯の精神を基礎として行われる時、それは立派な秩序となり、その秩序は進歩発展を自発的に永続して止まぬであろう。それは縦と横とに綾羅をなせる**複式網状組織**である。しかもそれは、**強権に依って固定さしめられる組織ではなくて**、常に流動して発展する多くのメロディの複合交響楽が成立するのである」。(石川『社会美学としての無政府主義』組合書店1946 (1932) )



- 「複式網状組織」は石川の自然観の反映でもあると思う。「自然」をモデルとした社会変革の理念。「無限の連帯関係」からなる「自然」と同じように、自律的な自治社会は、無数の中心をもつ「自然発生的な網状組織」が縦横無尽に「綾羅をなせる」。

宇宙は一つの芸術体である。春夏秋冬、花鳥風月、自然の奏づる交響楽でないものはない。社会もその宇宙の一部であり、また特殊な芸術体である。（石川『社会美学としての無政府主義』組合書店1946（1932）

- この「複式網状組織」に関連して気になったこと（質問として）。

⇒石川は「地域」に関してどのように考えていたか？

江渡狄嶺の場合は、人々の「生活の場」を「地域」とした。